

山田英二（2011年度日本英語学会賞（著書）受賞）

## ことばの宇宙

このたびは、このような素晴らしい賞をいただき、大変光栄に存じます。本研究のコアとなる着想が生まれたのは、今から 15 年ほど前になります。この 15 年間と、偶然ほぼ一致しておりますのが、2010 年 6 月に地球に帰還し、数本の映画化もされました、小惑星探査機「はやぶさ」の物語です。ご存知のように「はやぶさ」は、地球の引力圏から脱出して太陽を回る周回軌道に乗り、「イトカワ」という小惑星に到着し、その砂を地球に持ち帰ることを目的として作られた初の Asteroid Explorer です。しかしその間、搭載しているイオンエンジンが動かなくなるなど様々なトラブルに見舞われました。中でも最大のピンチが地球との完全なる通信途絶でした。どこにいるのかわからない。このままでは、宇宙の藻屑となってしまいます。「はやぶさ」は、太陽電池パネルを使って電気を生成し、電波を地球に送信しようと試みます。地球からも、方向と周波数を変えながら 1 万 5 千回以上も電波が送られます。多くの方は、「はやぶさ」の地球への帰還は不可能だと考えました。しかし偶然、「はやぶさ」からのごく微弱な電波が地球でキャッチされ、最終的には、様々なトラブルを乗り越えた「はやぶさ」は、砂の入ったカプセルを持ち帰るという Mission を成功させることが出来ました。

このような国家的プロジェクトとは比ぶべくもありませんが、時を同じくして私の本も上梓に至るまでに 15 年かかりました。その間、幼稚園児だった子供達は成人しました。私の船も、ことばの宇宙で何度も迷子になりかけましたが、「位置関数」というシステムを設けたことにより、独自の電波をなんとか発信することができたように思います。位置関数とは、それまでの韻律理論や最適性理論とは異なる音韻論の新たな枠組みであり、その関数の一つ一つが、パラメーターとして機能し、世界の多くの言語に対応できるようにと設計されております。この初めての電波をしっかりとキャッチして下さいました今西典子委員長をはじめとする学会賞委員会の審査委員の先生方に、心より御礼申し上げます。また、船出のずっと以前から、そして航海中も様々なご指導、ご鞭撻をいただきました藤原保明先生、ときにあたり、ルートを照らしていただきました原口庄輔先生、困難な出版をお引き受け下さいました開拓社の川田賢様、そして、最後になりますが、会長の稲田俊明先生、事務局長の西岡宣明先生をはじめとする数多くの日本英語学会員の皆様方に、心より感謝申し上げます。どうも有難うございました。

実は、90 年代も半ば頃、この新拙論の「芽」をあるところで発表したとき、その後の懇親会の背後で、「最適性理論に対抗しようとするドン・キホーテ」とのご意見を耳にしたことは忘れられません。新しいことに挑戦するのはいつの時代においても、見方によれば Quixotic であります。今も私は、新たな茫洋たる冥（くら）い宇宙の旅の途上です。今後は、運良く帰還できないかもしれません。しかし、それでも構いません。光というものは闇あってこそ生まれるものですし、ことばの宇宙を旅するという事は、世代を継ぎながら、そのあえかなる光を永遠に求め続けるということでしょうから。（本稿は、2011 年 11 月 12 日に開催された日本英語学会第 29 回大会懇親会でのスピーチを改稿したものです。）